



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

「令和の御大典」を前に

―男系継承の伝統を踏まへて、皇位の長期的安定を―

山口 秀範

「令和」始まる

新元号となつて二ヶ月、令和は急速に国民生活へと浸透しつつあるやうでご同慶の至りである。新しい御代を寿ぐ機運は世の中に漲つてをり、四十年前の元号法制化への根強い抵抗や、さらには学生時代のキャンパスに「天皇制打倒」の立て看板が林立してゐたことなどを思ふと、まさに隔世の感を禁じ得ない。

若い世代も此の度の御代替りを機に、我が国の連綿たる歴史や豊かな精神文化に誇りを覚えてゐるやうに見受けられる。様々な場で皇室の話題を特に構へることなく語れるのは実に心地よい。

即位礼正殿の儀

今後は今秋の御大典、「即位礼正殿の儀」と「大嘗祭」の二つが盛大かつ滞りなく肅行されることを祈るばかりである。

まづ、皇位継承を内外にお示しになる「即位礼」については、古代の式典の様を伝へる元明天皇の御製

(和銅元年・七〇八)が残されてゐる。ますらをの軻の音すなり物部の大

臣まつぶら楯立つらしも

「軻」は左の腕に巻く防具で、弓の弦が当たると鋭い音を発した。指揮を執る大臣(おそらく物部の末裔、石上麻呂左大臣であらう)が盾を整へる音もして、いよいよ大礼の始まる緊張感が高まつてくるお歌である。

奈良時代以前から脈々と続く即位礼が中断の危機に瀕した御代もある。応仁の乱後に即位された第百四代・

後柏原天皇が伊勢神宮へ捧げられた文書には「忝くも眇身を以て天之日嗣を受けしより以降、既に十有九年を早く送れり。然るに即位の大礼今に至るまで遂行されず。歲月空しく移りて宸襟無聊なり」と、皇位を継

承されてから二十年が過ぎんとするの即位礼も大嘗祭も行ふことの叶はぬご無念が記されてゐる。

朝廷財政の困窮の故に実に二十二年後、やうやく即位礼を挙行された安堵を、皇太子(後の後奈良天皇)が次のやうにお詠みになつた。

神祇(大永元年・一五二)

宮柱朽ちぬちかひをたておきて未の世までの跡をたれけむ

「宮柱を朽ちさせぬ」―皇統を絶やすことなく正しく伝へる、即ち即位の大礼を必ず行ふ―といふ誓ひを

果たされ、将来への範をお示し下さつたと、天帝を称へられたのである。

大嘗祭

かうして即位礼は何とか実現したが、続く「大嘗祭」を賄ふ資金はとも整はず断念、以降大嘗祭の中断は長きに亘ることとなる。江戸時代に入り天皇方は徳川幕府の専横をはね返さうと忍耐強く闘はれ、遂に貞亨四年(一六八七)、東山天皇(第百十三代)が二百二十一年ぶりに大嘗祭を再興なさつた。

翌元禄元年(二六八八)の新年、東山天皇は「立春の朝」と題して次の御製を詠まれた。

出づる日の光のどけみ岩戸あけし神代おぼゆる春もきにけり
元旦のどかな朝日を、天照大神

が天の岩戸からお出ましになつて再びこの世に陽光が差したといふ神話になぞらへ、春を迎へた喜びに溢れるお歌である。

と同時に、大嘗祭の神殿に「迎へたまふ大神はただ一座(天照大神)」で、「祭儀の中心を為すものは神と君と、同時に御食事をなされる…行事」(柳田国男「海上の道」と承ると、益々東山天皇の御製には大嘗祭を復活できた晴れやかさが込められてゐるやうに拝される。

皇位継承の長期的安定を

―重い「男系継承」の歴史―

かうして令和まで継承された盛儀を国民挙つて奉祝申し上げたいが残る懸念は、宮中祭祀と共に堅持されて来た男系継承を、安定的に確保する手立てであらう。現代的男女同権を持ち出して女系天皇容認を論ぶ野党や、皮相的な感覚を尋ねたアンケートなどに惑はされてはならない。

事は我が国二千年の歴史を貫く伝統に關つてをり、いま生きてゐる我々だけの判断では大局を誤る虞れありといふ謙虚さが求められる。もし、多数決で皇位継承のあり方を問ふのなら、万世一系を守り通した幾多の先人をも採決に加へるべきであらう。伝統の重みとはそれほどの力を持つてゐるのだから。

(株) 寺子屋モデル代表